



今年度春学期に着任された、韓国外国語大学の徐載坤先生が、ご自身の大きな二つのテーマの一つである戦争詩について、講演会を行いました。(ちなみに、もう一つのテーマとは萩原朝太郎です。)



↑ 海軍特別攻撃隊として、特殊潜航艇5隻で真珠湾に突撃した10名

攻撃は失敗だったにもかかわらず、戦死した9人は「九軍神」としてあがめられた。(一人は捕虜となったため、軍神とされなかった) →



「軍神」を扱った小説や詩が数多く書かれた。

大学院国際日本学研究院 CAAS ネット特別講演会  
共催：総合文化研究所



徐載坤 (韓国外国語大学校)

# 戦争詩と愛国詩 一戦中から戦後『荒地』まで

【コメント】 逆井聡人 (東京外国語大学)

2018/6/5 18:00-20:00

今年度春学期に、「萩原朝太郎と近代日本」というタイトルで、大学院生向けに水曜日4限に授業行ないました。



これまで日本では「戦争詩＝愛国詩」と捉えられてきたために、戦争詩を、良きにつけ悪きにつけ、きちんと批判／評価をしてこなかったという側面があります。例えば、従軍兵たちの詩は数多く作られました。そのような「生の声」を映す詩よりも、高名な詩人たちが歌う花鳥風月を取り入れた「日常の詩」が評価されました。

戦中～戦後の詩歌において、例えば、「荒地」(モダニズム)と「列島」(左派)を対置させるような枠組みが多々見られますが、果たして、こうした二分法を批判することなく受け入れ続けているものかどうか、また、鮎川信夫をどう位置づけるのか、といった逆井先生のコメントを受け、戦中～戦後詩は、「荒地」の評価を含め、改めて見直す必要があり、それが空白地帯を埋める第一歩となるだろう、という答えが徐先生からなされました。



コメントの逆井聡人先生と。場内からは質問の手がいくつもあがり、活発な議論となりました。



遅い時間の講演会でしたが、参加者は31名で、総合文化研究所がほぼ満席となりました。